

存在次元の形成に関する哲学的試論

—構想の原点としての私的思想を事業構想に発展させるための存在次元解釈—

岸波 宗洋

事業構想大学院大学 教授

要旨

本稿では、人間個々人が自己をどのように認識するのか、あるいはその存在を社会や他者等との相対経験に基づきどのように主観的・主体的価値化することで、各人の構想の原点となる存在次元を獲得するに到るのかについて、仮説考察するものである。これらは、構想に帰結するための実存主義等を軸とした哲学の応用的解釈を元に考えることとし、また、事業構想大学院大学において、各院生が存在次元とどう向き合い、どのように構想に紐付けたのか、帰納法的に捉えることも論考のひとつの前提としている。

キーワード：存在次元、自己の存在、他者との同価値性、世界性

1. 「存在次元」の解釈

「存在次元」の解釈については、これまでも様々な論を記述してきた（岸波 2018, 2019 など）が、事業構想大学院大学教授であり学校法人先端教育機構東英弥理事長の2016年講義「事業構想の基本」で示された「事業構想とは発案者の理想そのものである」という言説に基づいて着想を得た考え方であることをまず示しておく。

筆者は、「事業構想研究創刊号」の「事業構想における仮説考察」(岸波 2018)で「構想そのものの他者との共有性、同価値性を前提とした構想起点～」となる社会価値の主観的思考が必要であることを述べた。また、野中・徳岡(2012: 46)は「存在次元」の意味について「ビジョンの3つの特質、すなわち高質性（共通善のために広く社会に貢献していく意図）、革新性（新しい社会や価値創造の意図）、責任性（自らがリーダーとなって切り開いていく本気度）～」が事業をつくる重要な判断基準になる、としている。さらに、存在次元は、様々な経営者やリーダーがそうであるように、「自己のビジョンや信念に基づく」、という最も私的な発露を持つ。これは前述の「責任性」を理解する際に、「イノベーション推進者は、多くの場合、柔軟かつ強固な意思決定を求められることになる。簡単にいえば、失敗にも動じない

使命感が必要である。」という言説や、その理由としてマズロー（Maslow 2017）の欲求段階説を例に「尊厳欲求には低次レベルと高次レベルの区分があり、特に低次レベルでは、名誉、利権等に執着が見られる。マズローは、この次元での停滞をリスクと評価しており、本来の自己実現欲求の喚起には、尊厳欲求の高次レベル（自己尊重、自立性の担保）が有効である、としている。この流れによって、自己実現欲求（自身の能力を最大化し自身になりたい自分を具体的に獲得する欲求）が育まれ、最終的に自己実現者になり得る～」と示している（岸波 2018）。これらの意味を統合的に理解すると、以下のような解釈が想定される。

〈存在次元の形成を試論するための解釈〉

- 1) 構想者が自己の存在をどう認識するのか？（その思考、価値等の本質的理解）
- 2) 自己の存在と他者の存在との共有性、同価値性をどう認識するのか？（他者の本質的理解と共有されるべき便益や価値の理解）
- 3) 自己の存在と他者との同価値性の広がりに基づく世界性をどう認識するのか？（世界の本質的な理解とそのあり方）

自己の存在の探求において、哲学的起源はソクラテス(Socrates)であろう。問答法は、自己精神性の深淵を探る最も有名なメソッドのひとつであるが、これは、あくまで自己精神性の探求であり、「己という存在を知らない」ことを露呈し、不明瞭を経て本質に到達するためのプロセスと考えることができる。本質に到達する意味をソクラテスは「魂」を磨き「善者」となること、としている。これは、正に性善説の起源であり、人間という存在は善悪の判断を行うことができる唯一の存在である、という根幹的な思想に基づくものである。

筆者は事業構想大学院大学で担当するゼミ形式の講義において、問答法を多用している。院生が発表する事業アイデアについて「なぜその事業を思いついたのか?」「なぜあなたがその事業を行うのか?」などと矢継ぎ早に質問を繰り返す。最初のうちは、社会的背景や課題など表出された事実を列挙していくことになるが、質問を構想者自身の存在意義と関連付けた際には、殆どの院生は「好きだから」、「儲かると思うから」等、観念的な回答に終始することになる。この回答はいわゆる「無知の知」を提示することになり、この不明瞭な段階において思考を深め、より明確な自己説得性を獲得するための洞察、考察、内省が必要となることを構想者自身が理解するようになる。

しかしながら、ソクラテスの性善説は臨床心理学や犯罪統計においても明らかな通り、すべての人間が善悪の判断基準を根底に持ち得るかに疑問が残る。つまり、性善説は自己の存在と他者との同価値性を担保するキーファクターでありながら、そのメカニズムに言及がないブラックボックスであることが問題となる。そこで、哲学の系譜として、自己の存在をより主観的に解釈することができる実存主義について紐解く必要が生じる。

2. 「実存主義」における自己の存在

実存主義を著者の主観も含め簡単に言及すると、自己の存在を自己の解釈に基づいて理解し、自己の存在を統制あるいは発展させるすべての指向性を自己が主体となって獲得している、とする考え方である。その思想起点としてキルケゴール(Soren Kierkegaard)が諸説提示しているが、その代表的著書『おそれとおののき』(1843)において、自己の存在を最も偉大たらしめるのは信仰である、との言説を持ち、自身の出自(コペンハーゲン大学神学科)と信仰に基づく実存主義の解釈を表明し続けた。このキルケゴールの説は、性善説の不確かさを信仰により補うことを意図しているようにも理解できる。この実存主義の完成形はおよそサルトル(Jean-Paul Sartre)によってもたらされたと言える。上述の実存主義への解釈は、サルトルの言説に基づくものであり、最も有名な言葉である「実存は本質に先立つ」(l'existence précède l'essence)は、自己の存在

において、実存(自己が認識し得る存在)が本質を凌駕する、とする考え方である。これを、存在次元のひとつの解釈として表明するならば、「自己の存在を自己の認識において確立し、その意義や価値等は自己の認識においてのみもたらされるものである」と言えるのではないだろうか。また、その1943年の著書『存在と無』(Sartre 1999, 2005)における著者の理解は、あらゆる外部要因をおしてなお人間は自由であるべきで、自分が何者であるのかは、自己の存在の認識においてのみ規定される、と解釈できる。

それを総括する言葉としてサルトルは以下のように示している。「存在の中心に本質的な性質はない。我々は自由に望みどおりの自己と人生を創造することができる。」

ただし、上述のソクラテスの性善説の機序を規定するまでに到らず、冒頭で述べた「事業構想における存在次元」の検討事項の2)である「自己の存在と他者の存在との共有性、同価値性をどう認識するのか?」とともに以下に改めて言及する。

3. 性善説に依存しない「他者との同価値性」とは?

前述のサルトルの実存的規定に他者との同価値性を求めなければ、社会価値にも経済価値にも昇華できないことは周知の事実である。その性善説に関連した前述のサルトルの著書『存在と無』の記述によれば、「自己に対する意識を持つ事物(対自存在)」と「自己に対する意識を持たない事物(即自存在)」の2つに森羅万象を分化している。つまり、人間が意識していなければ、そこには何もない、言い換えれば、人間の本質は「無」である、という考え方である。無であるからこそ、人間は強制的に自由である、としている。さらに他者との同価値性について、同著書では、戦争という極限的な環境を例に「私と戦争は同義である～」とし、自己の存在における責任として、戦争と同化することもまた自由の代償として認識しなければならないとの考え方を述べている(強制的に自由である為、同化しなくては回避する方法はまた自由に選択できるはずである。とする考え方)。また、他者の意識を求める人間の本能として、自己の存在を意識することとともに他者の存在を自己が認識することで「現実存在」になり得ることも説明している。

事業構想大学院大学の筆者担当ゼミでは、筆者と院生の間でしばしば以下のようなやり取りが行われる。院生に対し「あなたは誰を助けたいのか?」という問いかけに「自分の家族(親、兄弟、配偶者、子息等)」を真っ先に挙げる。サルトルの言説になぞらえれば、それは自己以外に必要な「現実存在」の対象であり、家族という社会の最小構成単位が、サルトルの言う最も「自由と責任」を享受し得る対象であるという理解もできる。さらに踏み込めば、それが例えば「愛」という記号(人それぞれその言葉が持つ意味

合いが違うという意味で)に基づく表明であることが極めて多い、ということも付言すべきであろう。

これらのことは、性善説という考え方が、「愛」やそれに近い意味合いを持つ記号と意識の符合において表出されるというひとつの仮説でもある。

4. 存在次元と幸福論

一方、自己の存在と他者との同価値性において、自他意識の共通言語となる幸福価値についても触れておく必要がある。本大学院の著者が担当する同ゼミにおいて、頻繁にやり取りをしている事柄だからだ。「あなたの事業構想によってあなたと相手はどのように幸せになるのか?」という問いかけである。様々な回答があるが、例えば「ある製品サービスによって、生活上の便益(利便性)を与えることができる」という答えが最も多いのではないだろうか。人間には様々な幸福価値が存在する。欲求を満たす、という点において、消費行動に基づく便益の享受は無論であるし、経済活動の対価としてより多くの金銭を授受し得る幸福も存在する。その中で、1年次の院生に「50年後の未来に向けた事業構想」というテーマを講義中与えた際に、筆者が院生に提示をしたひとつの幸福価値の捉え方として「Harvard Grant Study」の成果が、多くの院生の事業構想に影響を与えたことを記憶している。「Harvard Grant Study」は、75年に渡りハーバード大学にて行われた成人発達研究である。最も端的な結論として「生涯に渡る人間関係の温かさが幸福価値に最大の影響を与える」とし、人間関係の質が最もプライオリティの高い幸福価値であることを表明した(George 2015)。このサジェスションは、75年間の研究期間がひとつのエビデンスとなり、人間の普遍的な幸福価値に最も近づいた研究ではないか、と院生が評価したものである。これらは、幸福価値が多様なエレメントにより成り立つことと共に、それらエレメントがレイヤーあるいは階層構造状をなして幸福価値の総合的な構造を形成しているのではないかと、という推論も可能になる。存在次元において、前述のサルトルによる自己の存在を認識する上でも、他者の相対的な意識に触れる経験あるいはその存在を意識することが、「本質的な性質を伴わない〜」自己の存在を認識する上で大変重要であることを、図らずも裏付けるものとは考えられないだろうか。

前述のように、「愛」¹⁾を指し示すこの幸福価値研究を、「50年後の未来」に照らして最も普遍的で取り組むべき課題であると判断した院生は、その存在次元として様々な事業手段につながる「愛」を表明していたことは言うまでもないだろう。

他方、幸福の哲学的解釈として、アリストテレス(Aristotle 2015)の『ニコマコス倫理学』(Nicomachean Ethics)にも言及しておくべきであると考えられる。アリスト

テレスもソクラテス同様、性善説を根源とした論を展開する。「人間の幸福は、欲求を満たす快楽から得られるものではない。理性的で有意義な人生の副産物として得られるものである。」この言葉の端緒は、アリストテレスが現実主義であり、森羅万象の中で人間が獲得した特異性を「理性」に見出していることが起点である。つまり、その特異性において人間の幸福足らしめる要因も備わっており、理性を追求すること、それを行うことにおいて幸福(語源的にはeudaimonia:「よく生きる」)または人としての最高善になる、という考え方である。これは事業構想という営みにおいて、多くの共通項を見出すことができる。存在次元が新たな社会的、経済的価値を生み出す事業構想になり、それは他者との同価値性を介して新たな進化した理性へのチャレンジが付きまとう。現代社会においてもなお解決されない問題に直面し、それを凌駕し、新たな理性のフレームワークを規定する。これはアリストテレスの言う真に人間の営みであり、人間のみが獲得し得る幸福価値と考えることができる。

5. 経済価値と存在次元

さらに存在次元を構成する上で欠くべからざる経済価値=お金について哲学的に解釈してみたい。この端緒として、スミス(Smith 2010)の『国富論』(The Wealth of Nations)によれば、貨幣経済の発展において物々交換の原則である「欲望の二重の一致」(お互いに異なる欲望が一致すること)は稀有であり、欲望の利便性を満たしたものが貨幣価値である。つまり、お金とは、最も自己の存在を認識しやすい「欲望」そのものであるが、自己の存在を精確に認識することができない、いささかばやけた最も単純なモノ(欲望を抽象化したチケット)であると考えられる。ただし、同著書においてスミスは「神の見えざる手」(Invisible hand of god)を説明している。これは、古典経済学的解釈として、自由競争原理自体が資源の最適な配分をもたらす(必要なものは売れるし、無用なものは売れない)という意味を持ち、その点においてドラッカー(Drucker 2006)の『現代の経営』(The Practice of Management)における「経営の本質は、顧客創造である」という表明が本意を得ているとも理解できる。つまり、現代経営学として意識すれば、「欲望=お金=顧客創造」という二次的解釈が成り立つ。

これらのことは、経済価値を追求するという存在次元を否定するものではなく、むしろ肯定している考え方である。顧客創造は、他者との同価値性の最たる経済活動であるし、その結果、欲望を抽象化したチケットに意味・価値を見出し受け取ることができる(「現実存在」を担保する「他者との同価値性」の結果である「顧客創造」により欲望のチケットを獲得することで、「自己の存在」と「他者との同価値性」を統合する[接着する]意味合いを持つ、という

解釈)。今日において、ドラッカー同様コトラー (Kotler 1999) の『マーケティングマネジメント』にもあるように「企業の存在意義は持続的成長である」ことを前提とした場合、自己の存在認識 (欲望) と他者との同価値性 (顧客創造の起点) に基づく存在次元を事業構想として昇華することが、見えざる手による経済合理性の担保、調整的な市場拡大に作用し、事業構想を成立せしめる原動力となることが期待できるだろう。

しかしながら、マルクス (Marx 1995) の『資本論』 (*Das Kapital*) を事業構想に照らして考えた場合、上述の経済価値が勝ることによる「物象化」から「フェティシズム (貨幣の物神化)」に事業構想自体が変異する (例えば、顧客 = お金と見てしまう、お金にならない労働者を捨てる等) 可能性を危惧しており、これは他者との同価値性を損なうだけでなく、自己の存在を揺るがす (欲望を満たすことができない)、つまり存在次元が破綻することを意味する。

つまり、お金は存在次元における様々な価値、思考、意識を融合する「接着剤」としての役割を果たしていると考えられることもできる。また、その接着剤としての経済価値に本意があるとするならば、恐らく経営的な意味での「成長」や「規模」は実存主義を総じて自己の存在の認識を原点とするため、その多寡 (より売れるか? 稼げるか?) は存在次元において構想者のみが規定することができる (フェティシズムに陥らないための布石) と考えるべきだろう。

6. 他者との同価値性の広がりに基づく世界性とは?

世界性という捉え方は、社会や国家、あるいは企業や共同体というものの自体が自然的な結果に基づくものではなく (同じ国家人民でありながら宗教や価値観が違い争いを続けているのが現状であるという認識を前提に)、強制的非合理的なある結論であると考えた場合、事業構想の捉えるべきものは「社会」ではなく、「世界 (その抽象的概念としての世界性)」と読み替えることができる、という著者の主観的な解釈に基づく。その世界というものの捉え方は、多様な哲学思想によって語られているが、あえてひとつのベンチマークに注目したい。それは「アメリカ合衆国」である。理由は単純で、最も短い時間に最も国家世界として成長せしめた、そして、それが51の州の合議体である、という特徴からである。このアメリカを国家ではなく、世界として解釈してみたい。

アメリカの哲学者の多くは「プラグマティズム」の根底思想を理解している。日本語においては「功利主義」、「実用主義」等と言われているが、人間が考え得るすべての事柄 (意識も概念も真理も思想も宗教もビジネスモデルも) は、その有用性 (結果的に役に立ったのか) という点においてのみ昇華されるべきもの、という考え方である。デューイ (Dewey 1968) の『哲学の改造』 (*Reconstruction in*

Philosophy) によれば、「探求の論理」は「着想、問題の設定、仮説の設定、推理、行動」というプロセスで成り立ち、その思考は「有効であること」を表明すること、が条件であると述べている。この思考自体は、我々が日常的に用いる「PDCA」等のビジネス思考と同じであり、さらに言えば、事業構想大学院大学のカリキュラム軸となる「事業構想サイクル」 (東 2018a, 2018b) と符合する。

前述した存在次元の検討事項において、「自己の存在の認識」と「他者との同価値性」は、ある狭いコミュニティにおいて整合を取ることはできるかもしれない (例えば、闇サイト殺人事件のように殺人衝動を持つ究極のマイノリティが出くわす可能性は、ネット社会において否定できない)。しかしながら、それが「社会資源化」 (岸波 2018) しなければ、事業構想の発展にはつながらない。その点において、デューイの論理は、「有用な合理性」という、事業構想において最も単純な自己の存在との融合媒介を獲得することで、世界性の獲得が可能であることを表明している、と考えることはできないだろうか。つまり、自己と他者という狭い段階的コミュニティの解釈ではなく、その他大勢に構想の便益をもたらすために、「有用な合理性」がなければ思想や哲学でさえ意味をなさない (世界をつくれぬ) ものである、とする考え方である。

では、その「有用な合理性」とはなにか? デューイの解釈からすれば、それは、自己の存在や他者との同価値性の先にある世界を構成する「結果」であるのだろう。しかしながら「哲学の改造」でも述べられている通り、結果とは一過性のものである。結果 = 本質ではない、という点において思考や思想を変異させていくことが定常的な活動になることもまた必然であり、デューイも同様に述べている。思考や思想を変異させる、ということは、自己の存在の認識や他者との同価値性も変異する可能性がある。これは「社会還元思考」 (Social Feedback Thinking) (岸波 2018) の考え方 (社会における理想的なあり方から存在次元や事業次元を想定、変化させる思考) とも符合するものである。

7. 求める「世界性」を捉えるイデオロギーとは?

さらに、存在次元を追究する際に、国家的イデオロギーの壁を我々は日常的に感じ取っている。著者が担当する同ゼミでのやり取りである。「事業構想を会社や上司に共有したところ、会社が求めるビジネスサイズではないからやめろ、と言われた……。」これは、恐らく企業内にて新規事業を担う者であれば、誰しもが直面する壁であろう。自己の存在を正しく認識し、他者との同価値性を担保し得る事業を考え、しかも「有用な合理性」に基づく未来の世界まで描けたはずなのに、だ。このような判断をする会社や上司が悪いのか? 前述のドラッカーやコトラーの言うように、資本主義下の企業における合目的は「持続的成長」で

ある。会社や上司の判断は、ある種の持続的成長に係る判断をしている、ということだろう。つまり、元を正せば、我々が当然の如く受け入れている資本主義社会それ自体が「その事業構想をやめろ」と言っているわけである。

我々が享受する現在の資本主義社会は、万能ではない(無論、万能な共産主義社会も存在しない)。この点を前述のマルクス(Karl Marx)の『資本論』(*Das Kapital*)から再度紐解いてみたい。

マルクスにおいても、サルトルの実存主義に抗う論理ではないと考える。マルクスは労働の意義を「自己実現」(Maslow 2017)と位置づけるが、様々な資本主義の弊害によって、その本意が満たされないと述べている。過度に生産性、効率性を重んじることにより、従業員の労働が部品化、機械化される「疎外された労働」や、労働に対する対価も雇用者の権益の大きさ故に正当性を失う「剰余価値の搾取」等が有名な話であろう。さらに、前述した「物象化」や「フェティシズム」によって、自己実現の機会を奪われるだけでなく、人間性そのものも失われていくことをマルクスは危惧している。サルトルの述べる「自己の存在に本質は存在しない」故の「自己実現」と捉えれば、マルクスとサルトルの事業構想における存在次元の意味は近いものであるはずである。つまりそれは、「自己の存在をどう認識するか、個人の自由である」という端緒を同じくしているわけで、にもかかわらず、労働の質が資本主義構造あるいは共産主義構造によって変異し、労働自体が「物象化」する中で、労働者の存在次元自体が失われていくという構図がある、ということではないか。

事業構想とは、本来このような国家のあり方も含めて「ソーシャルイノベーション」(岸波 2018)を検討すべき壮大な学問であるべきだが、一方で実学を志向し、院生やOB、OGの1人1人に経済的、社会的な幸福価値をもたらすものでなければならない。その点において最も考えなければいけないのは、個々人の資源性においてどのような事業構想自体のバランスを行うか、である。前述の「会社や上司をどう説得するか」と言い換えれば分かりやすいだろう。明確なバランスの要素のひとつは「持続的成長」にコミットし得る説得材が必要である、ということだ。恐らく企業が求める(特に規模の経済活動を行う企業群の)事業構想の要点のひとつは、規模である。「有用な合理性」をいかに多くの対象に提供するのか?もし、この問いにコミットできなければ、事業主体のあり方(子会社化、中間持ち株化等)や独立事業としての可能性も含めて検討することになるのは、言うまでもない。この事業構想としての具体的な手法は別途執筆にて着手することとする。

ちなみに、マルクスの『資本論』において、そのゴールは「共産主義社会」であるが、著者の期待は「第3のイデオロギー創造」である。資本主義でも共産主義でもなく、

一人一人の国民の存在次元を全うし得るイデオロギーの誕生を期待してやまない。

8. 存在次元の哲学的再解釈

上述のように、断片的な哲学的思想を元に、事業構想における存在次元とは何なのか?を検討した。勿論、哲学体系を網羅したわけではなく、哲学的思想と事業構想との親和性を省察するための実存主義等を軸とした構想者自身や他者の存在の捉え方と、プラグマティズム等を軸とした世界性と事業構想を融合させるひとつの取り組みとしての試論である。この試論に基づいて、事業構想における存在次元を再解釈する。

・存在次元とはなにか?

冒頭章にて述べた東、野中、岸波他の存在次元の仮説から、哲学的思想の解釈に基づく再解釈仮説は、以下の通りである。

- 1) 構想者が自己の存在をどう認識するのか?(その思考、価値等の主観的本質的理解)
 - ①構想者の理想、理性(高質性、革新性、責任性)および信念(志、使命等)の端緒の発見
 - ②自己の同価値性の端緒の発見(共有し得る自己の幸福価値とはなにか?)
 - ③自己の存在の概念定義(求め得る自己の存在意義とはなにか?)
- 2) 自己の存在と他者の存在との共有性、同価値性をどう認識するのか?(他者の主観的本質的理解と共有されるべき便益や価値の理解)
 - ①他者(対象となる人や物)の定義
 - ②他者の存在の認識(他者の理想、理性、信念の端緒の発見)
 - ③他者の同価値性の端緒の発見(共有し得る他者の幸福価値とはなにか?)
 - ④他者との同価値性の概念定義
- 3) 自己の存在と他者との同価値性の広がりに基づく世界性をどう認識するのか?(世界の主観的本質的な理解とそのあり方)
 - ①同価値性から派生する世界の「有用な合理性」の端緒の発見(世界がどのような幸福で満たされるのか?)
 - ②世界性の概念定義

上記1)~3)を構成要素とした構想者による一連の私的思想体系が存在次元であると再解釈する。

自己の存在は本質的意味を持たないため、個人が自己の存在をどのように認識するか、で、その意味や価値が変化する。事業構想の発露としての存在次元は、自己の存在の認識を起点としその思想の中で多様に構想を創造することが自然的思考であることは、サルトルの言説から前述した通りである。

そして、存在次元は構想者の主観的主体的性質を持たなければ、「自己の事業構想」という性質を持ち得ないため、その実現の責任性等理性も持ち得ない、ということにつながる。これらは暗黙知的アプローチ、言い換えれば自己の省察によって導出されるべきであろう。デューイのいう「有用性」や「結果」の解釈においても、社会的客観的指標ではなく、私的思想の一部としてまずは自己解釈することが必要であると捉えられる。これらの仮説的フレームワークとして図1を提示する。

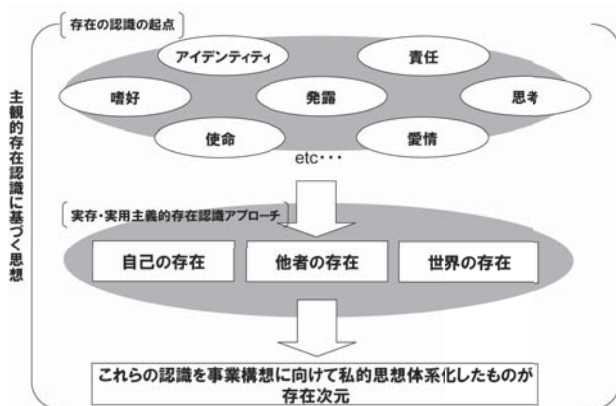


図1 存在次元の仮説的フレームワーク

ちなみに、そのような存在次元を前提とした事業構想の蓋然性や客観性に基づく社会貢献性や経済合理性の獲得に向けた思考は、形式知的アプローチによって事業構想や行動計画それ自体に付与すべきものである（勿論、前述のようにソーシャルイノベーションを事業構想として具体的に創造する段階で存在次元が変異することを否定するものではない）。ただし、自己の存在の正しい認識には様々な自己の内的変数が介在し、心理学的論拠によれば、パーソナリティによって様々な内省要素の解釈は異なる。その中で存在次元の思考に悪影響を与えるもののひとつが、「バイアス (Bias)」であると考えられる。以下は、本学院生から表出されるバイアスの例示である

- ・大学院での成果を会社の上司に報告する必要があるため、会社の経営計画等から逸脱した存在次元や事業構想は考えられない。
- ・個人の欲求や希望は特になく、会社から与えられたドメインを遂行するという存在次元ではだめなのか？

上記は、前述したマルクスの「疎外された労働」に基づく「物象化」が顕在化したひとつの例とも言えるが、このようなバイアスによって、前述の「存在次元の構成要素」を理解できず自己の存在を正しく認識することができない可能性がある。自己の省察において、あるいは存在次元の形成において、大きな阻害要因として懸念されるバイアスについて論を深める必要を感じる。この点においても、別途執筆にて着手することとする。

他方、存在次元が私的な思想体系であるならば、他者との同価値性や世界性にその範囲を広げる必要があるのか？という問いも理解できる。事業構想において、存在次元をどのような位置づけにするかにより、その解は異なるだろう。例えば、それが事業構想の責任性（構想を実行するためのパッション等）を付与するのみ、という解釈であれば、他者との同価値性や世界性は、事業構想の枠組みの中で具体的な事業構成を考えればよいし、そのほうが蓋然性を伴うエビデンスに基づく取り組みになる可能性がある。ただし、その場合、存在次元という私的の思想が事業構想に及ぼす影響は、責任性一点となり、私的の思想がソーシャルイノベーションとして「社会的なあるべき姿の提言」（岸波 2018）やヒューマンイノベーション「ソーシャルイノベーションへ向けた具体的な第一歩目の行動」（岸波 2018）にフィードバックされにくいのが故に、事業構想へのパッションが失われやすい、あるいは存在次元と事業構想が乖離しやすい、などの弊害も想定される。概念レベルであれ、存在次元として他者を意識し、世界を意識することはこの点においても有用であると考えられまいだろうか。

また、存在次元が私的な思想体系であるならば、前述のバイアスに基づく社会悪の活動の温床になってしまう可能性も考えられる（性善説の否定）。この点は、前述したように「愛」あるいは「理性」を前提とした人間のあり方によって、ある程度その活動を自然抑制する効果も期待できるが、あえて批判的事例を提示するならば、「テロリストが愛や理性の伴った思想に基づき殺人行動を起こす」といったことが起こり得る、ということだ。この点においては、まず存在次元＝行動計画ではない、とすることを前提としておくべきである。実際の行動計画は事業構想として検討すべき事柄であり、存在次元はあくまで私的の思想としての概念形成を促すことが肝要であると考えられる。前の第2次世界大戦を例にとれば、「家族を守る（存在次元）」＝「戦争に加担する（手段）」という短絡的な結果ではなく、存在次元における世界性をプラグマティズムで解釈していたならば、「家族を守る（存在次元）」＝「多様な守り方を模索し、時系列的な行動計画にフィードバックする（社会還元思考）」（岸波 2018）という事業構想との接続において、その思想の多様な行動計画としての解釈を検討する必要も生

じる。そして、存在次元の概念形成では、「高質性（共通善～）」や「同価値性」を思考の一助とし、省察における自己客観性を求めることも必要であろう。

そして、前述のアリストテレスの性善説的解釈である「人間の幸福は、欲求を満たす快樂から得られるものではない。理性的で有意義な人生の副産物として得られるものである。」という考え方が、事業構想家というコンピテンシーにおいて最も重要な概念であることも再度付言しておきたい。これらの一連の存在次元を思考する前提要件が、社会悪の思想化や活動化を自浄的に排除するもの、と考える。

9. 存在次元の導出方法（例示）

上記、断片的な哲学的思想から存在次元を俯瞰してきたが、これらの思想を論拠として、例示としての存在次元の導出方法を考える。

まず、前述の「存在次元の再定義」として示した項目に沿って構成要素を考えた場合、以下を例示する。

- 1) 構想者が自己の存在をどう認識するのか？（その思考、価値等の主観的本質的理解）
 - ① 構想を考える起点において自己の過去～現在までを、叙事的、叙景的、叙情的に考察、洞察、内省を行い、自己の存在とは何であるのか？の問いに本質的認識を見出す（図2）。

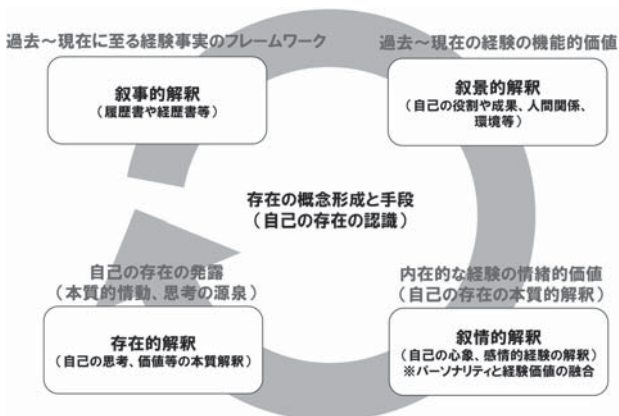


図2 自己の存在の認識アプローチの構造理解

■叙事的解釈：

例えば、形式的クロニカル（年表）をフレームワークとして検討する。例えば、～小学校や～大学、～会社への就職、～プロジェクトでのジョブ等。

■叙景的解釈：

クロニカルのトピックにおいて、どのような客観的・主観的景色（環境性）を有したのか？客観的景色は、周囲の人間の存在や事物との関わり、主観的景色とはその心象等を指す。

■叙情的解釈：

特に、主観的景色の洞察（どのような人とどのような会話をしてどのように感じたのか、あるいは非言語性の主観的、情感的解釈等）

■自己の存在の発露：

上記解釈から、自己の存在において欠くべからざるものとは何か？愛や友情、仕事、お金、趣味、思考（死生観等）、時間等様々な価値を検討する。

- ②①を踏まえた、未来のありたい自己の存在とはなにか？に暫定的解を見出す。

■存在の概念形成：

①における自己の存在の最上位概念はなにか？を前提に、例えば、「家族を幸せにすること」であれば、「家族の幸せとはなにか？」を考える。

※上記は、存在の発露が多様に考えられ、また各発露の優先順位を検討することは、相当な思考訓練を経なければ難解である可能性がある。従って、存在の発露を融合的に解釈し、概念形成する必要があるかもしれない。

■存在の手段：

上記形成された概念を活動に変えた場合、その手段を大まかに検討する。

※「手段」は、存在次元と事業構想の接続において重要な要素であるため、存在次元の一部として思考させる必要があると考える。

- 2) 自己の存在と他者の存在との共有性、同価値性をどう認識するのか？（他者の主観的本質的理解と共有されるべき便益や価値の理解）

- ① 自己の存在の認識と共に、他者の存在の認識を得る必要があり、自己と他者の存在を同価値化するのではなく、自己の存在の手段と他者の存在の手段が一致していることを確認する必要がある。

■過去～現在のアプローチ：

他者とは誰か？その存在とは何か？を叙事的、叙景的、叙情的解釈に基づき推測する。

上記、自己の存在に対するアプローチに準じる。自己としての他者の存在の認識を深める（一般的にペルソナ分析等と呼ばれる手法に基づく）。

- ②①を踏まえた、未来のありたい他者の存在とはなにか？に暫定的解を見出す。

■未来にありたい存在の概念形成と手段：

他者の存在の概念形成とともに、その存在の手段を総括せず、多様に列挙する（場合によっては分類する）。

■自己と他者の存在の手段を結合：

つまり、この段階で、自己の存在の手段と符合する他者

の存在の手段を紐付け、断片的な同価値のエッセンスを抽出することになる。

※「～存在の手段を結合」も、存在次元と事業構想の接続において有意義な思考となる可能性があるため、存在次元の一部として取り扱う。

3) 自己の存在と他者との同価値性の広がりに基づく世界性をどう認識するのか？（世界の主観的本質的な理解とそのあり方）

①自己と他者が存在する未来の世界とはなにか？を具体的にイメージする。

■未来の世界のマクロ概念：

どのような世界であるのか？その思想や政治、哲学、経済、文化、教育、総じて社会システムや課題等を概念的に想像する。

■未来の世界のミクロ概念：

未来の世界において、どのような製品サービス、ライフスタイル、趣味、嗜好等が存在するのか？そのエッセンスとなるものを想像する。

※「ミクロ概念」も、存在次元と事業構想の接続において有意義な思考となる可能性があるため、存在次元の一部として取り扱う。

上記のような存在次元の構成要素を構想者が認識した上で、体系的に思考することによって、存在次元が形成されていくと考える。また、前に述べたように、上述の構成要素は、概念形成レベルでかまわない。存在次元の構想者自身の思想に基づき、具体的にどのような企業、事業、製品サービスをつくるのか？そのコミットの仕方等を含めて事業構想として具体的にブラッシュアップしていくことになる。

10. 存在次元から事業構想への接続

存在次元というものが、構想者の自己、他者、世界の存在の認識に基づく私的思想体系であり、事業構想の起点であることを試論として明示した。一方で、存在次元を事業構想の起点として捉える場合、存在次元が事業構想へどのように接続されていくのか、その認識や価値を事業構想にもらさず踏襲するための接続思考も必要である。その点は、「存在次元から事業次元への事業構想深化」（岸波 2019）において社会還元思考と事業次元へのフィードバックについて以下のように記述している。

「存在次元」を用い、その意味を拡張する上で重要な思考法として、社会還元思考(社会価値を前提としたソーシャルイノベーション領域を規定した上で、現在形としてのスタートアップ事業＝ヒューマンイノベーション領域を規定し、そのスケールを担保するためのビジネスイノベーション

ン領域を規定するプロセス思考)～」。また、同著書にて「存在価値と理想の定義」であり、それを起点として、上述の社会還元思考の推進が可能である～」と記述している。ここで言う「存在価値と理想の定義」とは、まさに存在次元を端緒とした私的思想に基づくものである。つまり、社会還元思考を事業構想のひとつのフレームワークと考え、その構造化の前提として「存在価値と理想の定義」を存在次元によって獲得することで、事業構想自体へ存在次元をフィードバックすることができる。その概要を図3で示す。

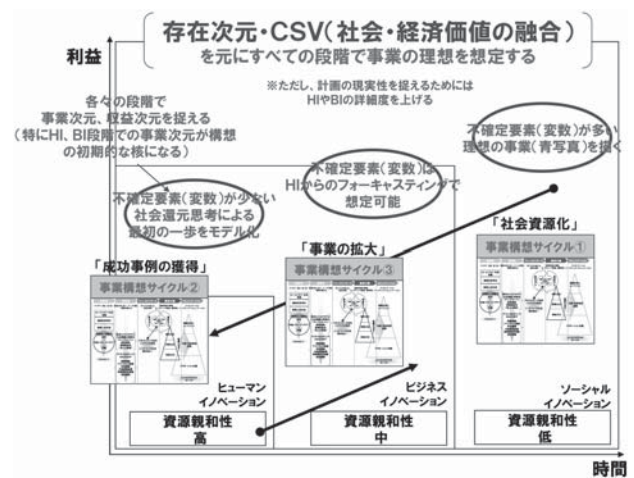


図3 社会還元思考と存在次元の関係

図3に示す通り、3つの構想段階（ヒューマンイノベーション～ソーシャルイノベーションに至る段階²⁾のすべてに、存在次元に基づく存在意義と理想の定義が必要であると考える。また、その検討の際にはハーバード大学マイケルポーター教授（Michael E. Porter）の論文「Creating Shared Value」（Potter and Kramer 2011）に基づく社会・経済価値の融合性を各段階の事業の礎にすることで、存在次元から事業次元への親和的な昇華を図っていくものであることも岸波（2019）にて記述した。

11. まとめ

本論は、哲学的思想を断片的に解釈をしながら、既に仮説として提示した「存在次元」の意味、価値、その思想としてのあり方を再度検討したものである。これらの論考によって、事業構想における「存在次元」の仮説としての解釈をより充実させ、事業構想の質を高める一助となれば幸いである。実存主義等に基づく自己の存在の認識によって存在次元の中核的要素を理解し、プラグマティズム等に基づく他者との同価値性や世界性を担保し得る省察を行い、自己の存在の認識を拡張し、事業構想へとつなげる概念形成の要素や導出手法までを論じた。これらの帰結は、存在

次元が「構想者自身の哲学そのもの」となることであり、この一連の私的思想体系は他ならぬ構想者自身の人生の指針や目標、幸福等の源泉となるべき存在の本質解が見事に集約されたものとなってほしい。そして、構想者自身が人生において希求し続けるもの、とも考える。

しかしながら、哲学的思想は深淵であり、その多様性の解釈を深め、存在次元を再び解釈することも必要であることを感じており、その点、今後の研究課題として付言しておく。

注

- 1) これは、Harvard Grant Studyの研究リーダーでもあるGeorge Vaillantが研究結果を総じた言葉と同じ。
- 2) 仔細説明は岸波（2019）参照。

参考文献

- Aristotle, 渡辺邦夫（訳），2015『ニコマコス倫理学』光文社。
- 東英弥2018a. 「なぜ今、事業構想が必要なのか——自ら事業を構想し、始める精神」『事業構想研究』1：29-30。
- 東英弥2018b. 「なぜ今、事業構想なのか？—第2回—」『事業構想研究』1：35-38。
- Dewey John, 清水幾多郎（訳），清水礼子（訳），1968『哲学の改造』岩波文庫。
- Drucker, P.F. 2006『現代の経営 上・下』ダイヤモンド社。
- 岸波宗洋2018. 「事業構想における存在次元の仮説考察—構想の発露と本質価値を思考する存在次元とは？」『事業構想研究』1：7-13。
- 岸波宗洋2019. 「存在次元から事業次元への事業構想深化——本質価値を有意にビジネス化する試案」『事業構想研究』2：1-11。
- Kotler, P. 1999. *Marketing Management Tenth edition*, Prentice Hall.
- Marx Karl, 向坂逸郎（訳），1995『マルクス資本論（全9冊）』岩波文庫。
- Maslow, A.H. 2017. *A Theory of Human Motivation* Start Publishing
- 野中郁次郎, 徳岡晃一郎2012『ビジネスモデルイノベーション』東洋経済新報社。
- Porter, Michael E. and Mark R. Kramer 2011 “Creating Shared Value.” *Harvard Business Review*, January-February 2011, 2-17.
- Sartre Jean-Paul, 松浪信三郎（訳），1999『存在と無（上巻）』人文書院。
- Sartre Jean-Paul, 松浪信三郎（訳），2005『存在と無（下巻）』人文書院。
- Smith Adam, 大河内一男（訳）2010. 『国富論 I』『国富論 II』中央公論新社。
- Vaillant, George E. 2015. *Triumphs of Experience*, Belknap Press.

**Philosophical essay on formation of the existence dimension:
Defining the existence dimension for developing a private idea as
the origin of a concept into a project design**

Munehiro Kishinami

Abstract

The purpose of this paper is to offer a hypothetical consideration on how each individual human being is aware of self, or on how he/she acquire the existence dimension that is the origin of an individual's concept, by subjectively or independently evaluating one's existence based on experiences relative to society or others, and so on. These are considered based on an applied interpretation of philosophy centered on existentialism, etc. in order to attribute to the concept. In addition, as one of the premises of discussion, these are considered inductively how each graduate student of the Graduate School of Project Design faces the existence dimension and how those are linked to the concept.

Keywords: existence dimension, existence of self, equivalence to another, universality